

# 西夏文『新集金砕掌置文』の研究 5<sup>1)</sup>

小高裕次  
(文藻外語學院)

## A Study of "Gold Nuggets in the Palm" 5

KOTAKA, Yuji  
(Wenzao Ursuline College of Languages)

キーワード：西夏語, 『新集金砕掌置文』

### 0. はじめに

#### 0.1. 本稿の目的

筆者は小高(2005, 2006, 2007, 2008)において、西夏人によって作られた西夏文字の識字教育用テキストである『新集金砕掌置文(以下、『金砕』と略)』の一部について紹介し、その日本語訳を試みた。本稿では、引き続き『金砕』本文第54連から第76連までの紹介を行う。底本もこれまでと同様俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所・中國社會科學院民族研究所・上海古籍出版社(1999)所収の『金砕』No. 741である。

### 1. 本論

#### 1.1. 『英藏黒水城文献』における「習字」文献について

『金砕』はイギリスのスタインコレクションにも複数の断片が存在している。スタインコレクションの影印本である『英藏黒水城文献』では、一部の断片は正しく同定されているものの、単に「習字」という説明が付けられているだけのものもある。「習字」文献は、各行の一文字目に大きめの文字で手本が書かれ、その下に同じ文字が繰り返し書かれている。西田は、この「習字」文献に書かれた内容が『金砕』の一部であると指摘した(西田1998)。

『英藏黒水城文献』において、すでに『金砕』の断片であると同定されているものうち、版本の形になっているものは以下の通りである。

2476RV 第32連—第34連、第35連—第38連。ただし各行5文字ずつ。コズロフコレクションの“𐽄”が“𐽅”になっている。

2477RV 第58連—第60連、第61連—第63連。ただし各行5文字ずつ。

---

1) 本研究は行政院國家科學委員會專題研究計畫(計畫編號 NSC 97-2410-H-160-004)の補助金によって行われた。

2478RV 第 55 連—第 57 連、第 52 連—第 54 連。ただし各行 5 文字ずつ。

2581 第 80 連第 2 句—第 83 連第 1 句。各連の第 1 句が下段に、第 2 句が次の行の上段に書かれている。

また、『金砕』であると同定された「習字」文献は以下の通りである。

2623 第 38 連 𠄎—𠄎

2624 第 38 連 𠄎—𠄎

2625 序文ではないかと推測されるが、コズロフコレクションと内容が異なるので詳細は不明。

また、西田(2005)は『英蔵黒水城文献』所収の断片のうち、0039・0354RV・0365 および同書末所収の 1907 が『金砕』であることを指摘した。その他、0120 についても、これまで知られているものと版の異なる『金砕』の内容が書かれたものではないかと推測している。

筆者は、上記の断片の他に、以下に挙げる断片が『金砕』の「習字」文献であることを発見した。

#### 1) 0036

楷書で 5 行分が残されており、行ごとに同じ文字が書かれている。1 行目は右半分が欠けているが、2 行目以降を見ると「𠄎𠄎𠄎」の文字が見られる。このことから、この文献は『金砕』第 9 連から第 10 連にかけての手習いであることが分かる。とすると、一行目の文字は「𠄎」であると推測される。

#### 2) 0073/0073V

0073 とナンバリングされたほうが楷書による習字で、0073V と名付けられたほうは草書体の文書である。不要になった草書体の裏面を習字に再利用したものと見られる。0073 には「𠄎𠄎𠄎」の 3 文字が一行ずつ書かれている。このことから、この文献もまた『金砕』第 9 連から第 10 連にかけての手習いであることが分かる。この文献は、上記 0036 と筆跡が似ているように思われるが、同一人物による書写であるかどうかについてはさらに研究が必要である。

#### 3) 3558

楷書で 9 行分が残されている。行ごとに同じ文字が書かれており、「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」の文字が見られる。これは『金砕』本文ではなく、序文 5 行目の一部である。このように、本文以外の部分も習字の対象になっていることは、『金砕』の識字教育テキストとしての実態が垣間見られて興味深い。なお、西田(1998)では、巻末の標題を書き記した「習字」文献の例も挙げられている。

#### 4) 3668c

三つの紙片が重なっている。仮に、右側の最も大きい部分を小断片 A、左側上部を小断片 B、左側下部、文字が上下反転している部分を小断片 C と呼ぶことにする。

小断片 A には、右から順に「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」の 5 文字が並んでいる。このことから、この文献は『金砕』第 50 連から第 51 連にかけての手習いであることが分かる。また、

小断片 B には、「𐰇𐰏𐰔」の 3 文字が見られる。これは『金碎』第 50 連、「𐰇」の直前の部分であるため、この部分は本来小断片 A の右側にあったと推定できる。

その裏面 3668cV は、小断片 A の裏側の部分には「𐰇𐰏𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘」の 6 文字が並んでいる。このことから、この文献は『金碎』第 49 行後半から第 50 行にかけての手習いであることが分かる。さらに、小断片 B の裏側には、「𐰇𐰏」の 2 文字が見られる。このことから、小断片 A と小断片 B の左右の位置関係が逆転していることが分かる。

また、小断片 C については、3668c の方には「𐰇𐰏」の 2 文字が、3668cV には「𐰇𐰏」の 2 文字が見られることから、小断片 C は小断片 B の下側に続く部分が、上下および裏表が逆になっているものと分かる。

また、整理の都合上第 50 連から第 51 連が書かれた 3668c が「表」、第 49 連から第 50 連が書かれた 3668cV が「裏」とされているが、実際はその逆で 3668cV を「表」、3668c を「裏」とすべきである。

## 1.2. 本稿で紹介する内容について

本稿で紹介する第 54 連から第 76 連には、西夏人の日常生活が描写されている。その内容は西夏人の人間関係・服飾・食生活を含む。本稿では、西夏文本文を紹介するとともに、漢夏対象語彙集『蕃漢語合時掌中珠（以下、『掌中珠』と略す）』<sup>2)</sup>および西夏語語彙集『三才雜字』<sup>3)</sup>における『金碎』収録文字の使用状況を解説する。

## 1.3. 『金碎』本文

以下に『金碎』本文第 54 連から第 76 連までの本文を掲げる。

54) ①𐰇𐰏𐰔𐰕𐰖𐰗𐰘 ②𐰇 ③𐰏𐰔 ④𐰕𐰖 ⑤𐰗

1yI: 1zwi:q 2no: 2dzo: 2gwu2

1ne: 1sa' 1mI: 1'i: 2tya:2<sup>4)</sup>

結婚は昔のしきたりなり、親戚は今に始まったことではない

①𐰇𐰏𐰔 1yI: 1zwi:q 「結婚」。『雑字』の親族名称の項に収録されている。

②𐰇 2gwu2 西夏語で頻用される連結詞である。

③𐰏𐰔 1ne: 1sa' 「親戚」。

④𐰕𐰖 1mI: 1'i: 「今、現在」。夏訳『孫子』にも用例が見える(35B4a)。

⑤𐰗 2tya:2 否定の連結詞である。

---

2) 西田(1966)、骨勒茂才著 黄・聂・史整理(1989)を参考にした。

3) 李・中嶋(1997)を参考にした。

4) 西夏語の推定音は、西田(1997)pp49-58に基づく。また、表記は基本的に荒川(2002)の簡易表記に従っている。

## 55) ①② 綏 綏 綏 ③ 綏 綏

2yo:n 1ldenq 2gwi: 1phyI'2 2phi:'

使者の言葉はおべっかで、みな色よきかを問う

## ④ 徹 徹 ⑤ 緜 緜 緜

1dzI: ? 1tsiq' 2neu' 1yI:r

- ①『雑字』に 綏 綏 綏 綏 綏 綏 緜 緜…「実家 使者 阿諛 侍仕 色良…」というこの連とよく似た表現がある。
- ②綏 2yo:n 1ldenq 『文海』『雑字』にも見られ、「使者」を意味する(史・白・黄 1983, 李・中嶋 1997)。綏 2yo:n は「親戚」、綏 1ldenq は「仕える」が本義である
- ③綏 1phyI'2 2phi:' 両者は韻書『同音』<sup>5)</sup>で互注の関係にあり、「阿諛追従する」の意味である。ここでは花嫁の美しさを大げさに語っていると考えられる。
- ④徹 1dzI: ? 『雑字』の親族名称の項に収録されている。徹 1dzI: は漢語「齊」からの借用語、徹 ? は「全て」の意味である。徹 1dzI: ? で「みな、全て」の意味になる。
- ⑤緜 1tsiq' 「色」。『雑字』では 緜 2gaq と書かれた部分が『金碎』では緜 2neu' となっている。ともに「良い、すばらしい」という意味の語である。ここでは親戚一同が花嫁の美しさを使者に尋ねているのであろう。

## 56) ① 窮 窮 窮 窮 窮

2luq ?lo 1lo: 2rer 2zyu

貧富 (の差) は福の際が足らず、背中とのどは全てのところに到る

## ② 胤 胤 ③ 胤 ④ 胤 胤

1wyor2 1ne:2 2ngo:r 2do 2nI:

- ①この一句を聶・史(1995)は「貧富福高低」と訳しているが、四文字目の 胤 2rer は「岸、(山の) 際」を意味する語であり、窮 2zyu は「欠ける、不足」意味する語であるため、上記のように訳した。
- ②胤 胤 1wyor2 1ne:2 胤 1wyor2 「背中」と胤 1ne:2 「のど」で食べ物と飲み物を表す。西田(1997)に詳しい。
- ③胤 2ngo:r 通常 胤胤 2ngo:r2ngo:r と二字続けて用いられ、「一切」の意味を表す。
- ④胤 2do 場所を表す位置詞。

## 57) ① 民 兵 混 混 混

2'yu 1myeq'2 1gwoq2 2si: 1lu2

民も兵も、男も女も混ざり、食べ物着物は各自で努力する

## ② 疑 疑 疑 疑 疑

2dzi: 2gwi: 1'e: 1tuq2 2lya'

- ①この一句を聶・史(1995)は「民庶男女混」と訳している。一文字目の 民 2'yu は「庶民」を意味する語であるが、二文字目の 疑 1myeq'2 は「兵」を意味する語である。
- ②疑 2gwi: No.742 では 疑 2gwi: 「穿く」となっているが、ここは動詞である 疑 2gwi: ではなく、No.741にあるとおり名詞の 疑 2gwi: 「着物」が正しいと考えられる。

5) 李范文(1986)を参考にした。

## 58) ① 掙 ② 諫 ③ 菟

1pa: 1pI: 1zi: 1hI:2 1lya'

父は子・孫を称え、母と姉妹は惜しむ

## ④ 姦 ⑤ 龐 ⑥ 彗 ⑦ 戩

1ma: 1mI: 1menq 1kyeq 1wyir

- ① 掙 1pa: 1pI: 『掌中珠』で漢語「爹爹」の訳語として挙げられている。また、『雑字』の親族名称の項にも収録されている。
- ② 諫 1zi: 「男」あるいは「子」の意味に用いられる。
- ③ 菟 1lya' 「称える」。夏訳『華嚴経』<sup>6)</sup>では「頌言」の訳語 菟 彗 2lya' 2naq として頻用される。
- ④ 姦 1ma: 1mI: 『掌中珠』で漢語「娘娘」の訳語として挙げられている。また、『雑字』の親族名称の項にも収録されている。
- ⑤ 龐 1menq 文献中では「娘」の意味で用いられることが多い。また、彗 1kyeq は「女きょうだい」を表し、年長・年少の区別をつける場合には後ろに 罽 2khwe 「大きい」・ 繡 2seu 「小さい」を付加して 彗 罽 1kyeq 2khwe 「姉」 龐 繡 1kyeq 2seu 「妹」とする。また、龐 彗 1menq 1kyeq については『掌中珠』では漢語「女妹」の訳語として挙げられている。

## 59) ① 媿 ② 媿 ③ 媿

1ya:r 1khyu' 1nI: 1wI: 2zeq'2

嫁を迎えて義母は安んじ、婿の強いのは義父の喜び

## ④ 媿 ⑤ 媿 ⑥ 媿 ⑦ 媿

1maq 1ngwo:n 1kI: 1'o 2nu:'

- ① 媿 1ya:r 息子の配偶者すなわち「嫁」を意味する。『雑字』の親族名称の項には 媿 媿 1zi: 1ya:r 「息子の嫁、媳婦」など 媿 1ya:r を含む語が挙げられている。
- ② 媿 1nI: 1wI: 配偶者の母を表す。後述するように、妻の母の名称と夫の母の名称は同じである。『雑字』の親族名称の項に収録されている。
- ③ 媿 2zeq'2 「居る」。夏訳『孫子』には 媿 媿 2de 2zeq'2 「安佚」などの表現もあることから、上記のように訳した。
- ④ 媿 1maq 「婿」。『文海雑類』に 媿 媿 媿 媿 媿 媿 「婿は娘の夫なり」とある。『雑字』の親族名称の項には 媿 媿 1menq 1maq 「女婿」など 媿 1maq を含む語が挙げられている。
- ⑤ 媿 1kI: 1'o 配偶者の父を表す。『文海』に 媿 媿 媿 媿 媿 媿 「媿”は“媿”なり、嫁・婿の“媿”なり」とあるように、西夏語は中国語と異なり、妻の両親の呼び方と夫の両親の呼び方に違いはなかった。『雑字』の親族名称の項に収録されている。

6) 西田(1975-1977)を参照した。

## 60) ① 鞞𦉳 ② 𦉳𦉳𦉳

1'a 1khyu 2dzo: 1ma: 1dwI

門下は婦人が知っており、外の言葉は夫君が管理する

- ① 鞞𦉳 1'a 1khyu 鞞 1'a は「門」、𦉳 1khyu は「下」で、漢語「門下」と意味的にも対応する。
- ② 𦉳𦉳𦉳 2dzo: 1ma: 𦉳 2dzo: は「人」、𦉳 1ma: は「女性」であるので、ここでは下の句「夫」に対する「婦人」と解釈した。
- ③ 𦉳𦉳 2ge: 2naq 𦉳 2ge: は「野、(家など囲まれた) 範囲の外」、𦉳 2naq は「言葉」という意味である。「外の言葉」の意味が取りにくい、一族との交際のことであろうか。
- ④ 𦉳𦉳 1wI 2gi: 「夫」。𦉳 1wI 単独で用いられることもある。また、𦉳𦉳 2gi: 2be: は「妻」である。
- ⑤ 𦉳 1kwan 漢語「管」からの借用語を表す。『文海』の注では「管」の意味の説明しか記述がないが、ここでは「管理する」の意味で使われている。

## ③ 𦉳𦉳 ④ 𦉳𦉳 ⑤ 𦉳

2ge: 2naq 1wI 2gi: 1kwan

## 61) ① 𦉳𦉳 ② 𦉳 ③ 𦉳𦉳

1go 2'u 1khwI: 2dI: 2'yu

家の中は犬が守り、家の外では泥棒が見て嫌がる

- ① 𦉳 1go 建物としての家、すなわち家屋を表す。
- ② 𦉳 1khwI: 西夏語には「犬」を表す語がいくつかあり、ここで用いられている 𦉳 1khwI: の他に、第5連では 𦉳 1na、第37連では 𦉳 1khI と 𦉳 1ta が使用されているが、十二支で用いられる 𦉳 1na の他は、それぞれの細かな意味の違いについてはわからないことが多い。
- ③ 𦉳𦉳 1ni: 2dI:r2 𦉳 2dI: 𦉳 2dI: 2'yu とともに「守る」の意。
- ④ 𦉳 1ni: 使用頻度の高い語で、建物・敷地だけでなく、家族としての「いえ」の意味も持つ。

## ④ 𦉳𦉳 𦉳𦉳

1ni: 2dI:r2 1kwyIr 2'yu 1khu

## 62) ① 𦉳𦉳𦉳 ② 𦉳𦉳

2rar 2phyi 1ldaq 1ti: 1chyu

質を開き手を持ってはいけない、禁じて(家が?) 傾くことを良しとしない。

## 𦉳𦉳 ③ 𦉳𦉳 ④ 𦉳 ⑤ 𦉳

1du: 1tsI: 1ca: 1mI: ?jwon

- ① 𦉳𦉳𦉳 2rar 2phyi 1ldaq この一句で「質草を渡して金を借りるようなことをしてはいけない」という意味であろうと推測されるが、𦉳𦉳𦉳 2rar 2phyi 1ldaq をうまく説明することができない。𦉳 2rar は「質、抵当」、𦉳 2phyi は「開く」、𦉳 1ldaq は「手」である。
- ② 𦉳 1ti: 禁止を表す助詞。動詞の前に置かれる。
- ③ 𦉳 1tsI: 順接の接続詞。
- ④ 𦉳 1mI: 動作を否定する助詞。動詞の前に置かれる。
- ⑤ 𦉳 ?jwon 「肯定する」「良しとする」という意味の動詞。

## 63) ① 𧯛 ② 𧯛 ③ 𧯛

? 1'onq ?lhI: 1ge: 1be:'

余りは充ち増えて倍に、利現れ滴積もって錢差しに

① 𧯛 ? 1'onq 𧯛 ? は「増える」「余り」。𧯛 1'onq は「円い」「(円状の) 範囲の内側」。𧯛 ? 1'onq で「余り」と解釈した。

② 𧯛 ?lhI: 「足りる」「充ちる」。

③ 𧯛 1ge: No.741 では 𧯛 1genq 「利益」となっているが、この文字は下の句でも使用されており、重複することになる。No.742 やスタインコレクション 2477RV では 𧯛 1ge: 「増える」となっているため、こちらに従った。𧯛 1ge: はまた「特殊」という意味も持つ。

④ 𧯛 1genq 1zenq 𧯛 1genq は「利益」。𧯛 1zenq は「現れる、明らかになる、着く」。

⑤ 𧯛 2kyer 1lenq 𧯛 2kyer 「滴」。利益として得られる錢の一枚一枚を滴にたとえたのであろう。𧯛 1lenq 「盛んになる、増える」。

⑥ 𧯛 1sa 「錢差し、緡」。穴の空いた錢に糸を通してまとめたもの。

## ④ 𧯛 ⑤ 𧯛 ⑥ 𧯛

1genq 1zenq 2kyer 1lenq 1sa

## 64) ① 𧯛 ② 𧯛 ③ 𧯛 ④ 𧯛

1he 1ka 1shwyI 1khwyI 1tu'

海をかき混ぜ珊瑚を探し、選んで瓔珞を貫く

① 𧯛 1he 漢語「海」からの借用語。

② 𧯛 1ka 漢語「攪」からの借用語。

③ 𧯛 1shwyI 1khwyI 「珊瑚」。『雑字』「宝」の項に収録されている。

④ 𧯛 1tsyer2 1genq 「選ぶ、選択する」。𧯛 1tsyer2 は単独で使用されることも多い。

⑤ 𧯛 2yI:r 2rir 「首飾り」。『掌中珠』や『華嚴經』では「瓔珞」の訳語として用いられている。また、『雑字』「女服」の項にも記載されている。

## ④ 𧯛 ⑤ 𧯛 ⑥ 𧯛

1tsyer2 1genq 2yI:r 2rir 2tshe:'

## 65) ① 𧯛 ② 𧯛 ③ 𧯛

1khu ? 2'eu: 1nyu 1ma:

碧珠玉の耳輪、かんざしに腕輪

① 𧯛 1khu ? 2'eu: 𧯛 1khu ? は「碧」と「珠」。『雑字』「宝」の項に収録されている。𧯛 2'eu: は「玉」。

② 𧯛 1nyu 1ma: 『掌中珠』で漢語「耳環」の訳語として使用されている。また、『雑字』「女服」の項にも記載されている。

③ 𧯛 1miq 2ji:2 1ja:2 『掌中珠』では漢語「釵鈿」の訳語として 𧯛 1ja:2 1miq という形で使用されており、また『雑字』「女服」の項にも記載されている。『雑字』「女服」の項にはその他 𧯛 1miq 2ji:2 「かんざし」も記載されている。

## ③ 𧯛 ④ 𧯛

1miq 2ji:2 1ja:2 1khwl: 2cyI

④薙薙 1khwI: 2cyI は『掌中珠』で漢語「腕釧」の訳語として使用されている。また、『雑字』「女服」の項にも記載されている。

66) ① 薙 薙 薙 薙 ② 薙

1kyiq 2ngo 2kye2 1zi:q'2 2je:

金銀珍宝あり、うずたかき量を蔵に入れて貯える

③ 降 尾 ④ 薙 ⑤ 薙 薙

1pwyuq 2be: 2'wuq 1ldwi:q ? 1syu

① 薙 薙 1kyiq 2ngo 「金銀」。『雑字』「宝」の項に収録されている。

② 薙 2je: 存在動詞。

③ 降 尾 1pwyuq 2be: 降 1pwyuq 「量」。尾 2be: 「高い」。

④ 薙 2'wuq 「蔵」。

⑤ 薙 薙 1ldwi:q 1syu 薙 1ldwi:q 「入れる、置く」。薙 1syu 「貯える」。No.749 本文では 薙 ? 「出す」となっているが、欄外に 薙 1syu と書かれており、訂正されたものと思われる。また、No.742 でも 薙 1syu となっている。

67) ① 綸 綸 綸 ② 綸 綸

1tyenq 2ryen2 1kwoq2 2no 1ja:2

綾・羅・絹のスカーフ、仕立屋を呼んで裁縫させる

③ 穉 穉 ④ 穉 穉 穉

1kyIr 1yyu 1gwer 1ra:r 1rIr

① 綸 綸 1tyenq 2ryen2 『掌中珠』で漢語「綾羅」の訳語として使用されている。また、『雑字』「絲」の項にも記載されている。

② 綸 綸 2no 1ja:2 『雑字』「男服」の項にも記載されており、「スカーフ」を意味する(李・中嶋 1997)。

③ 穉 1kyIr 「職人」。『掌中珠』では 穉 穉 1si: 1kyIr 「木匠」などの語が挙げられている。

④ 穉 穉 穉 1gwer 1ra:r 1rIr 『掌中珠』には 穉 穉 1gwer 1rIr 「裁縫」の語が見られる。また、穉 1ra:r は「書く」という意味を持つ動詞である。このことから、穉 穉 穉 1gwer 1ra:r 1rIr は布を裁ち、型を取り、縫い合わせるといった服を作るための一連の動作を表していると考えられる。

68) ① 綈 綈 綈 綈 綈

2ldon 2kuq 1rur 1wenq 2shi:'

上着は狭く短く合わせ、裙・袴は長くゆったりと

② 綈 綈 綈 綈 綈

1nyI: 1li:' 1jo: 1ze: 2de

① 綈 綈 2ldon 2kuq 『掌中珠』で漢語「襖子」の訳語として使用されている。また、『雑字』「男服」の項にも記載されている。綈 2kuq は「答える」という動詞の意味も持つ。

② 綈 綈 1nyI: 1li:' 『掌中珠』で漢語「裙袴」の訳語として使用されている。また、『雑字』「女服」の項にも記載されている。



## 69) ①嫩黻②矮隄駁

2bI 2du: 2'ar 1no 1ci:q'2

腹帯は胸をとりまき、靴下・靴は足の袋

- ①嫩黻 2bI 2du: 『掌中珠』で漢語「袜肚」の訳語として使用されている。また、『雑字』「女服」の項にも記載されている。
- ②矮隄 2'ar 1no 『華嚴経』では「臆」の訳語として 矮 2'ar が用いられる。隄 1no は「肋」と訳される他、音訳語として用いられることもある。
- ③駁 1'ye 2yyen 『掌中珠』で漢語「鞋襪」の訳語として使用されている。
- ④矮黻 1zi:q 1khI: 2'yen 『掌中珠』には 矮黻 1khI: 1zi:q という語が収録されており、漢語「靴」の訳語として使用されているが、ここでは 矮 1zi:q 単独で「靴」の意味を表していると解釈した。駁 1khI: は「脚」、黻 2'yen は「袋」である。

## ③靛黻④矮黻

1'ye 2yyen 1zi:q 1khI: 2'yen

## 70) ①氍毹②彡彣彤

1je: 1gwi: 1jI: 1wI 2bi

毛皮のコート・皮のマント、雨傘に粗布の衣

- ①氍毹 1je: 1gwi: 氍 1je: は「寒い」、毹 1gwi: は「裘」である。氍毹 1je: 1gwi: は冬に着る毛皮のコートであると解釈した。
- ②彡彣彤 1jI: 1wI 2bi 彡 1jI: は「皮」、彣彤 1wI 2bi は「合羽、マント」である。彡彣彤 1jI: 1wI 2bi は革製のマントであると解釈した。
- ③靛黻 2dzwyuq 2zir 靛 2dzwyuq 「雨」。黻 2zir 「傘」。
- ④矮黻 2zir 「毯」。粗い毛で作った織物。
- ⑤矮黻 2phI ? 『掌中珠』で漢語「褐衫」の訳語として使用されている。また、『雑字』「男服」の項にも記載されている。

## ③靛黻④矮黻⑤矮黻

2dzwyuq 2zir 1lhoq 2phI ?

## 71) ①苧蓐②苧蓐

1bI 2mwe 1shyI 1kI 1se:

木綿の糸袋は細く

## ③毳毼④毳毼

2mwe 1kwi:r 1kwyIr 2no' 1tsu

毛の襪袋は粗い

- ①苧蓐 1bI 2mwe 布材としての「木綿」あるいは「軟らかい」を意味する。
- ②苧蓐 1shyI 1kI 苧 1shyI 「糸」。蓐 1kI 「袋」。苧蓐 1shyI 1kI が具体的にどのようなものを指すのかは不明である。
- ③毳毼 2mwe 1kwi:r 毳 2mwe は「毛」。また音訳語としてもよく用いられる。毼 1kwi:r は「毛織物」。
- ④毳毼 1kwyIr 2no' 毳 1kwyIr は「目の粗い布」。毼 2no' は『掌中珠』で漢語「連袋」の訳語として使用されている。また『同音』では 毼 2no' が 毳 1kwyIr の注釈字となっている。

## 72) 𣎵𣎵① 𣎵𣎵𣎵

2phu 1khwI: 2tser 1wi:q 1'u:

木を切るのは斤斧の頭、集め切る人夫の鎌

## 𣎵𣎵② 𣎵𣎵𣎵

? 1genq 2menq 1'yi 1ji:q

- ① 𣎵𣎵𣎵 2tser 1wi:q 1'u: 𣎵𣎵 2tser 1wi:q は『掌中珠』で漢語「斤斧」の訳語として使用されている。𣎵𣎵𣎵 2tser 1wi:q 1'u: 「斤斧の頭」は、斧の柄を除いた金属部分あるいは刃の部分であると解釈しておく。
- ② 𣎵𣎵 2menq 1'yi 「肉体労働者」。『掌中珠』では漢語「体工」の訳語として使用されている。

## 73) ① 𣎵𣎵② 𣎵𣎵𣎵

1yi:q' 2pyu 1shya 2bo' 1tshi:

焼き物を焼くには砂の様子が必要 (?)、布を洗うには棒で叩くことが必要

## 𣎵𣎵③ 𣎵𣎵④ 𣎵

2khwa 1zI: 2bo 1rI:r2 1cho

- ① 𣎵 1yi:q' 「瓦、陶器」
- ② 𣎵𣎵 1shya 2bo' 聂・史(1995)はこの一句を「焼瓦要沙著」と訳している。また、西田(1997)は「陶器を焼くには、砂の色に任せ…」と訳している。𣎵 1shya は漢語「砂」からの借用語。𣎵 2bo' は漢人姓の音訳用に使われることが多いが、ここでは 𣎵 1bo' 「貌」に通じているのではないかと思われる。
- ③ 𣎵𣎵 2bo 1rI:r2 𣎵 2bo は「棒」。𣎵 1rI:r2 は「叩く」。
- ④ 𣎵 1cho 「必要」。また、「用いる」という意味で用いられることも多い。

## 74) ① 𣎵𣎵② 𣎵𣎵𣎵

2rI:r2 2son 1kya 2gyu 1lhenq

鍋・鼎・皿に鉢

## 𣎵𣎵③ 𣎵𣎵𣎵

1khu: 1wyuq 1tsiq' 2du2 1'i:q

お椀に杓子に箸に匙

- ① 𣎵 2rI:r2 𣎵 2son 『掌中珠』でそれぞれ漢語「鑑」「鼎」の訳語として使用されている。
- ② 𣎵𣎵 1kya 2gyu 『掌中珠』で漢語「器皿」の訳語として使用されている。
- ③ 𣎵𣎵 1tsiq' 2du2 「箸」。『掌中珠』では漢語「筴」の訳語として使用されている。

## 75) ① 𣎵𣎵𣎵② 𣎵

1'I: 1wi:q 1tsiq' 2'o 1yu:

親戚には茶・酒が先、親戚が食べるには米や麺をたくさん

## ③ 𣎵𣎵④ 𣎵⑤ 𣎵𣎵

2ldon 1ti:q 2khyi 1jo" 1jo"

- ① 𣎵𣎵 1'I: 1wi:q 「親戚(李・中嶋 1977)」。『雑字』の親族名称の項に収録されている。
- ② 𣎵 1yu: 「先、始め」を意味する名詞。
- ③ 𣎵 2ldon 『掌中珠』では 𣎵𣎵 1ne: 2ldon が漢語「親戚」の訳語として使用されている。
- ④ 𣎵 2khyi 「米」を意味するもっとも基本的な語である。『掌中珠』には 𣎵𣎵 2khyi 1phyon 「白米」など多くの複合語が記載されている。
- ⑤ 𣎵 1jo" 『掌中珠』で漢語「麵」の訳語として使用されている。

76) ① 𪗇𪗈 ② 𪗉 ③ 𪗊𪗋

2tshI: 2'u 1tsar2 2mI 1'i:

塩に山椒にかぶら、乳に油に野菜とヨーグルト

𪗌𪗍 ④ 𪗎 ⑤ 𪗏𪗐

? 1yeu: 2na' 1lhI: 1nwI:

① 𪗇𪗈 2tshI: 2'u 『掌中珠』で漢語「塩」の訳語として使用されている。

② 𪗉 1tsar2 『掌中珠』に 𪗉𪗊 1tsar2 1nya: 「胡椒」・ 𪗉𪗋 1tsar2 1'u: 「椒」・ 椒根 1tsar2 2ci: 「乾薑」の語が見られるため、𪗉 1tsar2 単独では「ぴりりと辛い香辛料」の総称を表すようにも思われるが、ここでは「山椒(花椒)」として訳した。

③ 𪗊𪗋 2mI 1'i: 『掌中珠』で漢語「蕪荑」の訳語として使用されている。

④ 𪗎 2na' 「○𪗎」の形で、多くの野菜を表す名詞の構成要素となる。

⑤ 𪗏𪗐 1lhI: 1nwI: 発酵乳製品であるが、『新集錦合道理』に 𪗏𪗐𪗑𪗒𪗓𪗔𪗕 「“𪗏𪗐” 飲めども唇は白からず」とあるため、液状のヨーグルトのようなものであると考えられる。

## 参考文献

- 荒川慎太郎(2002)『西夏文『金剛經』の研究』,京都大学博士論文
- 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所 中國社會科學院民族研究所 上海古籍出版社 編  
(1999)『俄藏黑水城文獻 10』,上海古籍出版社
- 骨勒茂才著 黄振华・聂鸿音・史金波整理(1989)『番漢合時掌中珠』,宁夏人民出版社
- 小高裕次(2005)「西夏文『新集金碎掌置文』の研究 1」『東アジア言語研究』,8:1-8
- 小高裕次(2006)「西夏文『新集金碎掌置文』の研究 2」『東アジア言語研究』,9:16-23
- 小高裕次(2007)「西夏文『新集金碎掌置文』の研究 3」『東アジア言語研究』,10:19-26
- 小高裕次(2008)「西夏文『新集金碎掌置文』の研究 4」『東アジア言語研究』,11:30-40
- 李范文(1986)『同音研究』,宁夏人民出版社
- 李範文・中嶋幹起 編著(1997)『電腦处理 西夏文雜字研究』,不二出版
- 林英津(1994)『夏譯《孫子兵法》』上下,中央研究院歷史語言研究所
- 聂鸿音・史金波(1995)「西夏文本《碎金》研究」『宁夏大学学报』7(2):8-17
- 西田龍雄(1966)『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏語の解説』II,座右宝刊行会
- 西田龍雄(1975, 1976, 1977)『大方廣佛華嚴經』I-III,京都大學文學部
- 西田龍雄(1997)『西夏王国の言語と文化』,岩波書店
- 西田龍雄(1998)『西夏語研究新論』西田先生古希記念会編
- 西田龍雄(2005)「『英藏黑水城文獻①』」『東洋学報』87(3):125-133
- 史金波(1988)「西夏汉文本《杂字》初探」『中国民族史研究 2』167-185,中央民族学院出版社
- 史金波・白滨・黄振华(1983)『文海研究』,中国社会科学出版社
- 史金波・黄振華・聶鴻音(1993)『類林研究』,寧夏人民出版社